

はじめて聞く、古典芸能の扉

「狂言を2倍楽しむ法」②



あーっ、は、は、は、は、は、はー



わ！いきなり大きな響く声！びっくりしたわ



狂言の笑いをちょっとやってみたのじゃ。

最初の「あーっ」は天井に声をぶつけるように大きな声で。ソフィちゃんもやってごらん。

隣から苦情がでないかしら……でも、なんか気持ちがスカッとした！

それはよかった。笑いは狂言のなかでも最も重要な要素なのじゃよ。

観ていて思わず笑ってしまう場面にもいろいろあるのね。

そう、ちょっと長くなるが、狂言の中の笑いの種類を紹介しようか。

まずはことばの表現のおかしさ。現代に通じるダジャレもそのひとつじゃな。

次に粗忽者や当り前のことをちっとも知らない人間など登場人物の性格によるおかしさ。

嘘が見つかってしまったり詐欺まがいや失敗談などストーリー展開が抜群に面白い演目もある。

それから、表情やしぐさなど演技のおかしさ。

これは面を付ける能とちがって狂言ならではの写実味で名人芸の見どころのひとつ。

あの人の袴、丈が短かすぎ。

見た目そのものが笑えるじゃろう。そして、狂言は最後には幸せ、みんなハッピーに収まる話がほとんどだが、大団円に至るまでの、舞、踊り、謡のほのぼのとした楽しさ。ときどき見ているほうも踊りだしたくなるなあ。

もうひとつ、狂言ならではの特徴として当時の時代をチクリと風刺するおかしさも見逃しがたい。

仏師や山伏など、御常連の連中は狂言が成立した時代、力も持っていたし、身近な場所に出没しておおいに人々の耳目を集めたのだろうなあ。

いいやつも悪いやつも、目に余るやつもたくさんおったらしい…と、笑いながら想像できる。

流行りものも自然に分かるわね。

たとえば「末広がり」では当時人々の間で大いに盛り上がっていた春日講が背景になっているし、

あまり知られていないが、平等寺(京都 通称:因幡堂)は狂言にしばしば登場する。きっと深い関わりがあったはず。

本だけでは中々伝わらない、生き生きした歴史が辿れるわね。

能との関連も深いでしょう？

能の作品をほぼそのままパロディ化したものもあるよ。

狂言の「通円」は能の「頼政」、「棒縛」は「松風」のパロディじゃ。

悲劇と喜劇っていう単純なものでもないような気がするけど。

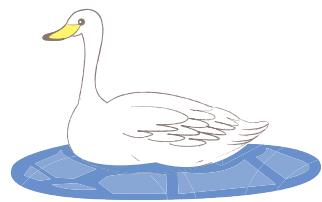
いいところに気がついた！

悲劇の逆だけを演じて、あるいは重いテーマを敢えて貶して、げらげら笑うだけの単純な喜劇ではなく。

あのね、笑っているあの人を見ているだけで私も笑えるけど、面白いっていうだけでなく、面白哀しい…。
そういう「笑い」ってこんなものだよねって。それでいて何か、もやもやしたものがすっきりするような洗練されたものを見ている気がするの。

滑稽味の中にも、狂言師たちが600年の間に厳しく守り伝え、表現の仕方を追い求め、未だに工夫進化させている様式美がありありと存在するからかな。
万人に共有できる「笑い」という感情でありながら、さっきやってみたように表現方法は様式的で、誰にでもすぐにできるものでもない。そこには庶民的な軽みもあり、ふと莊重な感じもあり…。
矛盾したものを同時に表現している不思議な芸能じゃ。

絶妙なバランスを見せもらっているのね。
言葉の使い方は違うかもしれないけれど薄い氷の上を、美しく滑って行く白鳥みたい。
見ている方は楽しめても演じる側は大変ね。
それこそ、常にテクニックと精神力の両方必要だもの。



だからこそ、そのリスクを演技に昇華させた名人と言われるひとの舞台をぜひ見てほしい。

能では流派の様式の微妙な違いを教わったけれど、狂言は「名人」の見比べをしてみたい。
和阿弥さんはいくつも見ているのね。

同じ演目で見比べる幸運に恵まれた。同じ作品であれば展開も様式も同様だから、観客が受け取るものもそれほど差がないだろうと思ったら大間違。磊落な個性や計算しつくされたような緻密な表現。
どれも名人芸として堪能したなあ。同じ場面の酒の徳利の振り方にも個性がそれぞれにじみ出たりして。

作品のあらすじと見どころをわきまえていれば、ここぞと思う場面での見比べの楽しさがあるわけね。

ようし、ではぜひ今度、能と狂言を鑑賞しにでかけましょう。

狂言の楽しみ方 11

- あらすじ、見どころをわきまえて見る。
- 演技のポイントに注目する。
- 作品の背景、関連知識を知る。
- 流儀による台本、演出の違いを知る。
- 名人の舞台を見る。
- 能との関連で見る。パロディなど。
- 歌舞伎との関連で見る。
- 狂言の実技を習得する。
- 狂言の普遍的価値をよく理解する。
- 狂言の笑いの種類を知る。
- 地域との関連を知って見る。

知つているとさらに楽しさ深まります。

プラスアルファ

- 「右流左止(うるさし)」
- 春日信仰
- 「身替座禅」 歌舞伎との関連